

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

## 五郎太の苦悩

「さようか。この岩山と格闘するは、腕前は勿論のこと、知恵と精神力が問われるところであるのお。彌兵衛、そちらなら、みごと遣ってのけようぞ。松江藩の財政さえ許せば肩入れしてやりたいのは山々なれど、今はそれが出来ぬ状況でな、せめてもの褒美として米三十俵をつかわす。成功を祈っておるぞ」

権太夫は静かに、しかし、誠意を込めて彌兵衛を励ました。権太夫は多くを語ることはなかったが、その心情は、十分に彌兵衛の心に届き、傷心の彌兵衛を奮い立たせた。

家老、三谷権太夫の視察は彌兵衛を力付けただけでなく、工事現場の人夫衆をも励まし、意宇川の切り通しの工事は、目に見えて進展した。けれども彌兵衛のお供をする五郎太は、このところ、すっかり無口になり、元気を失っていた。

未だ夜が明けきらぬ川土手の道をいつものように歩きながら、彌兵衛は五郎太に話を切り出す機会を探っていた。ここなら誰に気兼ねすることも無く、五郎太の気持ちを聞いてやれる。

「五郎太、少し疲れたような気がする。この土手に腰を下ろして、休んで行こう」

彌兵衛は五郎太を促し、草叢に腰を下ろした。



画 寺戸良信

「旦那さま、珍しいことがお有りですなあ。お元気な旦那さまが、そんなことを仰しゃるなんて…」

五郎太は、そう言いながら彌兵衛の側に腰を下ろした。

「のう、五郎太、このところ、おまえの元気の無いのが気になっておるが、なんぞ悩みが有るのか？困ったことでも起こったのか？よかったら、わしに胸の内を聞かせてもらえぬか」

五郎太は彌兵衛に胸の内を見透かされ驚いたが、一瞬考えた後に決心したように語り出した。「忙しい旦那さまに御心配をかけてはいけないと一人で悩んでおりましたが、ゆうさまの御病気が、このところよく有りません。一日一日と衰弱しておられるように思えて、じっとしてられない気持ちです。村の衆は旦那さんが剣山を削りなさったから、竜神さまの祟りだと、もっぱら騒いでおります。私は出来ることなら、この仕事からお役を免除していただけたら…と願っております。周藤の家を守り、ゆうさまのお側で、看病させていただくことが出来ましたらと、叶わぬ願いを心の中で、ずっと思っております。旦那さま、どうぞ、お許し下さいませ」

「そうで有ったか。五郎太はゆうが幼いころから妹のように、よく世話を焼いてくれたからのお。けど、五郎太、竜神さまの祟りで人が病気になるたりはせんぞ。水を治めようと努力している我等に、竜神さまは味方して下さることは有っても祟ったりはなさらん。その証拠に、今度の工事を始めてから四年になるというのに、水書で村が被害を受けることが無いであろう」

五郎太は、毎日を唯、唯、夢中で過ごしてきて、この四年間が、どんなに長い歳月だったのかを考えてみることもなかった。